文章理解における接続詞の働き¹

北海道大学 伊藤 俊一²・阿部 純一

Function of connectives in text-understanding

Toshikazu Ito and Jun-ichi Abe (Department of Behavioral Science,
Faculty of Letters, Hokkaido University, Kita-ku, Sapporo 060)

This experiment was conducted to investigate the function of connectives in text comprehension. Twenty six subjects were instructed to read six texts, each containing several target sentences. Eighteen target sentences were provided, and each of the subjects was presented half of the target sentences in their original form, i. e., with a connective (Connective condition, C), and the other half, without a connective (No-connective condition, NC). After reading, subjects were asked to recall all the target sentences. In recall, all the sentences preceding the target sentence were presented as a cue. Recall rate was higher for the C condition than for the NC condition. The result indicated that connectives facilitate text comprehension. This effect was seen most clearly in three connective categories called *jyunsetsu* (e. g., causality), *gyakusetsu* (i. e., adversative), *hosoku* (i. e., supplement) in Japanese.

Key words: cognitive processes, reading comprehension, memory, psycholinguistics, text structure.

文章 (text, テキスト) を読む場合には、そこに含まれる文 (sentence, センテンス) を互いに関係づけ、文章全体としての意味を理解することが必要となる。読み手は、一般的に言えば、文章を構成する文をひとつずつ前から順に読んでいくため、それぞれの時点では、それまでに読み終えた部分といま読んでいいる文との接続関係を (意識的にせよ無意識的にせよ) 見い出すことを努力することになる。

ある文がその前の部分とどのような関係にあるかは、通常、そこまでの“文脈”とその文に記されている内容とから“推論”され、理解される (Clark, 1977; Hobbs, 1979; Sanford & Garrod, 1981)。しかし、接続詞がある場合には多少事情が異なる。広瀬 (1984) は、接続詞は次の文の大まかな姿勢を予告する指標であるとし、このような予告機能が接続詞の重要な機能であると主張している。

では、実際に、接続詞の有無によって、読み手の接続関係の理解、ひいては文章の理解に違いが生じてくるものであろうか。本研究の第1の目的は、このことを確認

することにある。

ところで、接続詞があるために文章の理解が促進されるとしたら、それはどのような心的機構によると考えられるであろうか。大雑把には、それは、接続詞からの情報を利用することで文の接続関係を推論する処理の負担が軽減されるためといえるかもしれない。文の接続関係には様々なタイプがある。そして、それらの各タイプの接続関係の理解は、それぞれタイプの異なる推論によって達成されると考えられる。では、その推論処理はどのようなタイプの接続関係の場合に難しく、どのようなタイプの接続関係の場合に易しいのであろうか。また、それぞれの場合、接続詞の付加でどの程度その処理が促進される (負担が軽減される) ものであろうか。本研究の第2の目的は、この、接続関係のタイプと接続詞の効果との関係について、実験的な考察を加えることにある。

以下に記す実験では、文章の“理解”の程度を示す測定度として再生率を採ることとし、上記の2つの目的に対しとりあえず記憶成績の面から取り組むことにした。なお、本研究は、読み手の文章理解過程を探る研究の一環として、接続詞がその過程でどのように利用され、どのような心理的效果をもたらすかを解明しようとする努力の第1段階に位置するものである。

方 法

被験者 被験者は北海道大学文学部の学部学生 26 名であった。

材料 中学生用および高校生用の国語の教科書・問題

¹ 本研究は昭和60-61年度文部省科学研究費補助金 (一般研究 (c)), 課題番号 60510038, 研究代表者阿部純一, および、昭和61年度同補助金 (特別研究 (c)), 課題番号 61220001, 研究代表者阿部純一) の補助を受けた。

² 実験制御プログラムの作成にあたり李 光五氏 (北海道大学大学院, 現韓国暁星女子大学) のご援助を頂きました。記して謝意を表します。

Table 1
各ターゲット文の平均再生率

接続関係	接 続 詞	条 件		t
		有接続詞(%)	無接続詞(%)	
順 接	したがって (1)	20.77	5.38	2.20*
順 接	したがって (2)	34.62	29.23	.65
順 接	だ か ら	29.59	22.49	.99
逆 接	と ころ が	9.23	9.23	.00
逆 接	し か し (1)	26.50	26.50	.00
逆 接	し か し (2)	45.30	34.19	1.57
逆 接	し か し (3)	31.54	20.77	1.68
補 足	た だ し	58.65	45.19	1.51
補 足	た だ	40.59	27.97	1.34
累 加	そ し て (1)	19.23	14.10	.98
累 加	そ し て (2)	10.58	11.54	-.13
累 加	さ ら に	17.75	18.97	-.48
累 加	ま た	9.95	5.43	1.34
同 格	た と え ば	2.22	1.62	.64
同 格	つ ま り	17.95	17.95	.00
対 比	それとも	27.47	25.27	.21
転 換	と ころ で	58.79	58.79	.00
転 換	い っ ぽ う	35.90	41.03	-.38
平 均		28.57	23.97	1.99*

* $p < .05$

集より6つの文章を選び、それぞれの文章の1節を刺激材料とした。使用された文章の題名と作者、およびその1節の文字数は次のとおりである。“友よ”林 京子(183文字)，“人間と政治”丸山真男(242文字)，“活字媒体の今日的な意義”岡部慶三(291文字)，“方言と共通語”加藤正信(291文字)，“人とつき合う方法”河盛好藏(328文字)，“風神帖”亀井勝一郎(592文字)。

これらの文章中にはそれぞれ数個の接続詞が含まれているが、その中から各文章につき平均3個、計18個の接続詞を選び実験の対象とした。対象とした接続詞は以下のとおりである。したがって(2個)、だから、ところが、しかし(3個)、そして(2個)、さらに、また、それとも、ところで、いっぽう、たとえば、つまり、ただし、ただ。

これらの文章および接続詞の選択にあたっては、いくつかの代表的な接続関係カテゴリーに含まれる接続詞を網羅するよう配慮した。すなわち、上記の18個の接続詞は、それぞれ、従来の日本語研究において代表的とされている7種の接続関係カテゴリー(順接、逆接、補足、累加、転換、対比、同格)のいずれかに属するもの

である(Table 1 参照)。ただし、対象とする接続詞の個数は各接続関係カテゴリーで多少異なり、また、同じ接続詞を複数個対象として選んでいる場合もある。これらの配慮は、大まかにではあるが、各接続詞の一般的な使用頻度を考慮に入れたことによる。

使用されたすべての文章が、付録に示されている。

条件 6つの文章が被験者に呈示される際には、実験対象とされる18個の接続詞それぞれについて、次の2条件が設定された。すなわち、接続詞が原文通り示される条件(有接続詞条件)と、接続詞が原文から取り除かれて示されない条件(無接続詞条件)の2条件である。各被験者には、18個中の半数が有接続詞条件で、残りの半数が無接続詞条件で、それぞれ呈示された。どの接続詞が有・無どちらの接続詞条件で呈示されるかは、被験者ごとにランダムに、しかし全体では各接続詞について等頻度になるように定められた。なお、その際には、被験者個人内で同一文章中の対象接続詞すべてが片方の条件に偏ることのないよう配慮された。

手続き 被験者は1人ずつ実験室に呼ばれ、ディスプレイ(NEC製PC9801F2に接続されたNEC製高解像度ディスプレイPC8853A)の前に座らされる。ついで、被験者は、ディスプレイ上に呈示される文章を読むことを要求される。この“読解作業”時に、被験者は、内容を良く読んで理解して欲しいという以外の教示を受けない。すなわち、後に記憶再生作業があること、この実験が接続詞に関するものであること、あるいは、2つの条件があること、などは知らされない。

読解作業では、被験者は用意された6個の文章すべてを読む。文章が呈示される順序は、被験者ごとにええられているが、全体ではカウンターバランスされている。

それぞれの文章の呈示方法は次のとおりである。まず、文章の呈示位置を示す凝視点がディスプレイ中央に呈示される。それから約5秒後、その位置に白い横長の“窓”が現れて(背景は黒)、この窓の中を文字が一定速度で右から左へ移動してゆく。窓の大きさは横並びの8文字分であり、その前後の文字は見ることができない。つまり、窓は8つの文字ますからなっており、各文字が1ますごとく左へ移動する形で刺激は呈示される。1つの文字がある特定のますに留まっている時間は32ミリ秒で、その時間が過ぎると1つ左のますへずれる。この速度で文字を移動させると、文章が高速で流れてゆくように見える。32ミリ秒に1ますという速さは、例えば早口で音読が可能なくらいの速さである。このような呈示方法を採用した理由は、被験者間で文章を読み進める速さを一定に保つということと、被験者が飛ばし読みをしたりあるいは前に戻って読み返したりすることを避けるということにある。

被験者は1つの文章においては初めから最後まで連続

して読むことになるが、1つの文章の呈示が終わってから次の文章の呈示が始まるまでの間には30秒の休止が与えられる。各被験者には、前述したように、対象となる18個の接続詞のうち9個が有接続詞条件、他の9個が無接続詞条件で呈示される。その際、無接続詞条件の接続詞の部分では、接続詞が取り除かれた分だけ文字はつめられて呈示される。つまり、被験者は、もともとあった接続詞が取り除かれていることを、その呈示の方法からは知ることができない。

6つの文章すべての読解作業が終わった後、約2分後から、その読解作業での文章の理解度を調べるための“再生作業”が行われる。

被験者が再生を要求されるのは、対象とされた接続詞を“原文で”文頭に持っていた18個の文すべてである。以下、これをターゲット文と呼ぶ。各ターゲット文の再生は、その文の前までに書かれていた部分を手がかりとして行われる。具体的手続きは以下のとおりである。

被験者は、読解作業の場合と同様にディスプレイ上を流れる文章を読む。その文章は、読解作業の際に呈示された6種の文章であり、その呈示順序も同じである。各文章は先頭から流れはじめ、ターゲット文の前まで来ると止まる。被験者は、その次にあったと思われる1文を所定の用紙に書き再生しなければならない。再生が終わると、中断された箇所から再び文章の呈示が始まり（再生を要求されたターゲット文から呈示が再開される）、次のターゲット文の前でまた止まり、同じく次の1文の再生が要求される。

このような手順で各ターゲット文を順次再生してゆき、すべてのターゲット文を再生したところで再生作業は終了する。

なお、この再生作業時に呈示される文章は、被験者ごとに、読解作業時に読んだ文章と全く同じものにしてあり、読解作業時に取り除かれた接続詞はここでも呈示されない。したがって、被験者の再生作業においても、接続詞のことを特に意識させるような手がかりは何もない。

結果と考察

再生率算出の手順 各被験者からは、反応データとして、有接続詞条件、無接続詞条件それぞれ9個の再生文が得られた。その再生文がどれだけ原文に忠実に再生されたかを調べるために、以下のような再生率算出の手順を採った。

まず、ターゲット文の原文を、文節を基本単位として分解した。被験者の再生文を、この分解したターゲット文と照合し、ターゲット文中の各文節が被験者の再生文の中に現れているかどうかを調べた。再生文の中からターゲット文に含まれている文節に対応する語句を数え、

ターゲット文の全文節数に対するその比率を再生率とした。再生文中の語句がターゲット文の文節と一致していない場合でも、その語句が、ある文節と同じ意味を持つと判断できる場合には、再生されたものと考えた。

なお、有接続詞条件では呈示時にターゲット文の文頭に接続詞が付いていたが、それらの接続詞は再生率算出の対象からは除くこととし、別途分析することにした。

このようにして得られた再生率は、ターゲット文自体の理解の程度、さらにはそのターゲット文が文章の中で他の文とどの程度深く関係づけられているのか、その関係づけの理解の程度を示す指標として考えることができる。本実験ではターゲット文の前に位置する文章部分が再生の手がかりとして与えられるが、それが有効な手がかりとして働くためには、ターゲット文が前の部分と関係づけて記憶されていることが前提となるからである。なお、文章の記憶再生成績は、そのような意味の関係づけの理解の程度に依存せず、文章中の個々の文をそのまま丸暗記することでも高くなり得るが、本実験のような大量の文章量が高速で呈示される状況では、丸暗記的記憶は不可能であった。

ターゲット文の再生率 各ターゲット文の、有接続詞条件、無接続詞条件それぞれの平均再生率をTable 1に示す。ターゲット文の再生率は、有接続詞条件、無接続詞条件ともに、文間で大きく異なっており、1.2%から数十%にまでわたっている。このような再生率のばらつきには、多種の要因の働いていることが考えられる。

まず第1に、それぞれの文章自体の全体的難易度が個々のターゲット文の再生率に影響していることが考えられる。例えば、本研究で用いられた“人間と政治”という文章は、道徳、宗教、政治などを題材とした抽象的思考性の高い難解な文章であったが、この文章に含まれるターゲット文の再生率は概して低かった（したがって(1)、ところが、たとえば）、逆に、“人とつき合う方法”という文章は、交友関係という読み手にとって馴染み深い内容を持った平易な文章であり、ターゲット文の再生率は概して高かった（しかし(1)、したがって(2)、ところで、しかし(2)）。

また、他の要因として、各ターゲット文が持つ情報の重要性も考えられる。例えば、“風神帖”という文章において、“また”を文頭に持つターゲット文は、日本のコミュニケーションの問題点を列挙した文の1つであり、もしこの文が削除されたとしても、文章全体の意味はさほど変化しないと考えられる。つまり、この文の情報は、文章全体からみてあまり重要でないと考えられる。このことが、この文の再生率が低い1つの原因として挙げられるかもしれない。一般的にいて、累加的、同格的な接続関係を持つ文は、文章全体からみた重要性が低い場合が多いようである。本研究でも、概して、累

加的, 同格的な接続詞を文頭に持つターゲット文の再生率は低いという傾向が見られた。

他に, 各文の難解さ, 長さ, 文章内での位置などの要因が働いていると考えられるが, 本研究では, これらについて特定の傾向を見出すことはできなかった。本稿の以下の考察では, 同一の文の理解, ひいては記憶が, 接続詞の有無によってどのように影響を受けるかということにその焦点をしばることにはしたいと思う。

接続詞の有無による再生率の差 各ターゲット文の, 有接続詞条件・無接続詞条件それぞれの平均再生率を Table 1 に示す。18 個のターゲット文のうち 11 文において, 有接続詞条件の再生率が無接続詞条件に比べて高かった。これに対して, 無接続詞条件のほうが再生率が高かったのは 3 文であった。他の 4 文については再生率に差がなかった。ただし, 統計的に有意な差がみられたのは, 原文で“したがって (1)”が使用されていた 1 文のみであった ($t=2.20, p<.05$)。

全ターゲット文の平均再生率は, 有接続詞条件のほうが有意に高かった ($t=1.99, p<.05$)。つまり, 全体的にみた場合, 接続詞が付加されることによってその文の理解が良くなる傾向が認められた。この結果だけから, 読み手がどのような方法で接続詞を利用しているのかを知ることはできない。しかし, 少なくとも, 接続詞がある場合には, 読み手は実際に接続詞から得られる何らかの情報を利用して, 接続詞がないときとは違った, より効率のよい (負担の少ない) 文章処理を行っているということは推測できる。

接続関係と再生率の差 この実験で対象とされた接続詞 18 個は, それぞれの接続詞が規定している接続関係によって, 以下に示す 7 つのカテゴリーに分類することができる。この分類は, 従来の国語研究における一般的な分類 (永野, 1972 など) を基本とした。

- 順接 したがって・だから
- 逆接 ところが・しかし
- 補足 ただし・ただ
- 累加 そして・さらに・また
- 転換 ところで・いっぽう
- 対比 それとも
- 同格 たとえば・つまり

この分類に基づいて, 条件間の再生率の差を個々に考察してみよう。

順接の接続詞 (“したがって”, “だから”) を持つターゲット文はすべて, 有接続詞条件で再生率が高く, この接続関係においては接続詞の効果が大きいと考えられる。

逆接の接続詞を持つターゲット文 4 文のうち, 2 文では再生率に差がなかった。“ところが”を持つターゲット文は, 接続詞の有無に関わらず再生率の絶対値が低か

ったが, これはこの文を含む文章全体の難解さによると考えられる。“しかし (1)”を持つターゲット文は, 逆接の接続詞を使っているながらも, 内容的に逆接性が希薄な文であると考えられる。つまり, 逆接の接続関係が本来持っているはずの後文が前文の主張を覆すという性質は, この文ではあまり明らかでない。実際, 後に Table 2 で示すように, このターゲット文では, 接続関係の認識を示すと思われる再生時の接続詞付加率が低かった。これらの理由から, これら 2 文においては, 接続詞の効果が結果の上に反映しにくい状況にあったと考えられる。他の 2 つのターゲット文では, 有接続詞条件での再生率が高く, 接続詞が理解を促すという傾向が見られた。

補足の接続詞 “ただし”, “ただ” を持つターゲット文は, どちらも, 有接続詞条件での再生率が高く, 接続詞が理解を促す傾向が見られた。

他の接続関係のターゲット文では, 再生率に差が見られる文はあったものの, 接続関係ごとに見た場合, 全体的な傾向は認められなかった。累加, 転換のターゲット文では, 有接続詞条件でかえって再生率が低いものもあり, 同格, 対比のターゲット文においても顕著な接続詞の効果は見られなかった。

接続詞によって文章理解が促進されるのは, その接続詞によって得られる何らかの情報が文の接続関係の推論を容易にするためであると考えられる。とすると, 接続詞によって理解が特に促進される接続関係というのは, もともとその関係づけの難しい接続関係ということができるかもしれない。なぜなら, そのような接続関係においては, それだけ接続詞に対する依存度が高くなり, 接続詞の効果も顕著になると考えられるからである。

本実験で, 順接, 逆接, 補足という接続関係の 3 つのカテゴリーにおいて, 接続詞の効果が, 他の接続関係に比べて顕著に見られたということは, これらの接続関係が他の関係に比べて処理負担が大きい, ということを示唆していると考えられる。

これら 3 つのカテゴリーの接続関係の中で, 特に逆接の接続関係については, それがもともと理解し難い接続関係であることが過去の研究でも指摘されている (安井・熊谷・井上, 1985 など)。逆接の接続関係とは, 前に述べたことや, そこから当然予想し得ることとは逆のことを後の文で述べるという性質を持つ接続関係である。読み手は前に述べられたことを前提として後の文を理解しようとする傾向がある (Abe, 1982) ため, 後の文で前の主張を覆すようなことが言及されるという事態は, 読み手の持っている予想を最も裏切る事態といえる。そのような場合に接続詞があると, その関係づけの方向が限定されることになり, その分だけ推論処理が容易になるのかもしれない。

補足の接続関係というのは, 従来, 前の文で述べき

なかったことを後の文で補うという性質の接続関係とされている。その意味で、前で述べたことの原因を後で述べるときに使用される接続詞、例えば“なぜなら”なども含むカテゴリーである。今回実験で使用された補足の接続詞は“ただし”と“ただ”の2つであり、これらはどちらも、前で述べたことに対して後で制限を加えるという接続関係を示すものであった。これらの接続詞が用いられている文では、一般に、前での主張を部分的に否定することになる。このように考えると、この補足の関係で接続詞付加の効果が大きくみられたという結果も逆接の場合とまったく同様に解釈できそうである。

実際、“ただし”、“ただ”のターゲット文の再生では、有・無両接続詞条件とも、これらの接続詞を付加して再生した反応は1例もなく、むしろ、“しかし”など逆接の接続詞が多く生成された。この結果は、読み手が、“ただし”、“ただ”で表されている接続関係においても、実質的には逆接の接続関係と同種の処理を行っていることを示唆するものであろう。このことから、補足の接続関係における接続詞の効果を逆接の場合と同様に解釈することが妥当であると考えることができる。しかし、一方、このような結果が得られたということは、これらの接続詞を従来のように補足というカテゴリーに分類して逆接の接続詞と区別することの妥当性に疑問を呈することにもなる。接続詞の機能的分類に関しては、今後は心理学的立場からの提案も必要とされるであろう（伊藤・阿部、印刷中）。もっとも、本研究では、考察の拠り所としてとりあえず従来の分類に従うことにする。

順接の接続関係においてもまた大きな効果がみられたということは、この接続関係にも、接続詞がないと理解がそれだけ困難になる性質が含まれていると考えることができる。ただ、順接の接続関係というのは、前で述べられたことが後の文で述べられることの原因や、理由、きっかけになっているという性質を持つ接続関係であり、その意味では、逆接や補足の一部の接続関係のように前で述べたことを否定して読み手の予想を裏切るということはない。むしろ、前に述べられたことから当然帰結されることが後で述べられるという点で、逆接や補足とは逆の性質を持っていると考えられる。なぜ、この順接関係で接続詞付加の効果が大きく見られたのかということについて、明確な説明を与えることは難しい。

ただ、順接の接続関係には、前の文と後の文がある種の因果関係あるいは時間順序関係を含むものが多いが、このような関係には実に多種多様な変化があると考えられる（例えば、原因-結果、可能、動機づけ、共起、目標-手段、など）ため、その下位処理の複雑さもまた大きなものとなっている可能性がある（阿部・邑本、1984, 1985）。さらに、その関係づけの処理は読み手が持つ一般的世界知識に基づいて行われることになるが、その知

Table 2
各ターゲット文の接続詞付加率

接続関係	接 続 詞	条 件	
		有接続詞 (%)	無接続詞 (%)
順 接	したがって (1)	46.15	23.08
順 接	したがって (2)	15.38	15.38
順 接	だ か ら	76.92	46.15
逆 接	ところが	46.15	7.69
逆 接	し か し (1)	15.38	.00
逆 接	し か し (2)	84.62	69.23
逆 接	し か し (3)	69.23	53.85
補 足	た だ し	53.85	38.46
補 足	た だ	69.23	46.15
累 加	そ し て (1)	15.38	7.69
累 加	そ し て (2)	7.69	.00
累 加	さ ら に	38.46	15.38
累 加	ま た	23.08	7.69
同 格	た と え ば	15.38	23.08
同 格	つ ま り	7.69	15.38
対 比	それとも	15.38	15.38
転 換	ところで	7.69	15.38
転 換	い っ ぽ う	23.08	23.08
平 均		35.04	23.50

識検索がまた他の接続関係処理に比べ膨大で処理負担の大きいものになっていることも考えられる。このようなことが、順接関係において接続詞付加の効果が大きく見られた原因として、指摘できるかもしれない。

再生における接続詞の付加 被験者の再生文には、接続詞が記入されているものも見られた。有接続詞条件では読解作業において接続詞が提示されていたので、それを忠実に再生したということも考えられるが（ただし、原文通りでない接続詞も生成されていた）、無接続詞条件では、読解時に接続詞は示されなかったもので、その記入は被験者が自発的に行ったということになる。

各ターゲット文について、接続詞が付加されて再生された文の比率が調べられた。Table 2 にその値を示す。接続詞の付加率が高いターゲット文は、両条件ともに、順接、逆接、補足の接続詞を持つものが多かった。例えば、接続詞付加率 40% 以上のターゲット文は、有接続詞条件では順接2文（“したがって (1)”, “だから”）、逆接3文（“ところが”, “しかし (2)”, “しかし (3)”）、補足2文（“ただし”, “ただ”）、無接続詞条件では順接1文（“だから”）、逆接2文（“しかし (2)”, “しかし (3)”）、補足2文（“ただし”, “ただ”）が挙げられるが、他の接続関係のターゲット文においては、両条件とも皆

無であった。もちろん、順接、逆接、補足の接続関係においても接続詞付加率の低い文があり（例えば、“したがって（2）”、“しかし（1）”）、接続関係の性質だけが接続詞付加率に影響していることにはならないが、これを1つの要因として考えることはできよう。

また、順接、逆接、補足の3カテゴリーは、再生率において接続詞の効果が大きく見られたカテゴリーでもある。特に興味深いのは、もともと接続詞が示されなかった条件の被験者も、接続詞が示された被験者と同様に、順接、逆接、補足のカテゴリーで接続詞を多く付加している点である。その接続関係が本来理解し難いものであるならば、その推論処理を少ない負担で理解するために読み手はより接続詞に頼ることになる。逆に、書き手の立場から言えば、そのような接続関係の情報を伝達する時には、文頭に接続詞を付加するということがかなりの程度身に付いているということであろう。

一 般 的 考 察

伊藤・阿部（印刷中）は、被験者に2文からなる文章の間に適切な接続詞を入れさせて、その文章に対する接続詞の必要性を評定させた。その結果、必要性が高く評定された接続詞カテゴリーは、本研究における順接・逆接・補足の接続関係に対応するカテゴリーであった。これは、被験者が主観的に接続詞が必要かどうかを判断した結果であるが、これらのカテゴリーは本研究で接続詞付加の効果が大きかったカテゴリーに対応している。これらの接続関係は、読み手にとって関係づけの処理にかかる負担が大きい関係であるとともに、書き手にとっては接続詞を付加することが通例となっている関係である、ということができよう。

本実験で用いられた文章は、その作者によってあらかじめ接続詞の使用が決定されている文章であり、その接続詞使用の妥当性は作者の判断にゆだねられていた。それらの文章の表現の一般的妥当性は、中学・高校の教科書の素材として採用されているという事実からある程度認められるとしても、各作者の接続詞使用上の個人的“くせ”などもあることが考えられ、そのような偏りに関する事前のチェックは必要であったかもしれない。

梶（1985）は2つの文が接続関係にある条件として、“1. 2つの文が1つの話題に何らかの関係を持ち、2. 同一の形式で表現されて、3. 隣接している時”という3条件を挙げている。このような条件は、特に接続詞がなくても文章中の文は多かれ少なかれ満たしている条件である。現実には存在する文章においては、接続詞が使用されている文の割合は決して高いものではなく、また、接続詞の使用がむしろ不適切であるような文も認められる。接続詞の研究は、それらの場合をも考慮にいれながら、すなわち“文章の理解”という全体的な問題の枠組

みの中で進められなければならないであろう。

引 用 文 献

- Abe, J. 1982 Schema representation of “Speaker-World” in natural language processing. In R. Trappl (Ed.), *Cybernetics and systems research*. Amsterdam: North-Holland. Pp. 885-890.
- 阿部純一・邑本俊亮 1984 理由づけのあり方について——文章理解における深層的推論過程への一アプローチ——日本認知科学会第1回大会発表論文集, 38-39.
- 阿部純一・邑本俊亮 1985 物語理解研究のための因果的意味関係表現体系の一提案（その1）——命題および命題間関係の分類と物語内世界の設定について——基礎心理学研究, 4, 67-74.
- Clark, H. H. 1977 Inferences in comprehension. In D. LaBerge & S. J. Samuels (Eds.), *Basic processing in reading: Perception and comprehension*. Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates. Pp. 243-263.
- 梶 広巳 1985 接続詞と文章の展開 日本語研究, 56, 13-27.
- 広瀬正宣 1984 文章における連接形式について 井上和子（編）昭和58年度文部省科学研究費補助金（特定研究1）報告書 明確で論理的な日本語の表現（中間報告）Pp. 49-58.
- Hobbs, J. R. 1979 Coherence and coreference. *Cognitive Science*, 3, 67-90.
- 伊藤俊一・阿部純一（印刷中）接続詞の可換性による分類と必要性 北海道心理学会・東北心理学会第6回合同大会発表論文集.
- 永野 賢 1972 文章論詳説 朝倉書店
- Sanford, A. J., & Garrod, S. C. 1981 *Understanding written language*. New York: Wiley.
- 安井美代子・熊谷滋子・井上和子 1985 談話における文構造の働き 井上和子（編）昭和59年度文部省科学研究費補助金（特定研究1）報告書 明確で論理的な日本語の表現（最終報告）Pp. 5-27.

——1987. 7. 9. 受稿, 1988. 1. 16. 受理——

付 録

以下に実験で使用された文章を示す。アンダーラインが引かれている文がターゲット文であり、その文頭の接続詞が条件設定の対象となった接続詞である。同じ接続詞が複数個使用されている場合には、接続詞の後に番号を記した（Table 1 参照）。また、ターゲット文は、/で区切られているが、これは再生率算出の際の文節単位を示している。

出勤時の風景は、32年前の朝と変わりがなかった。遮断機が上がるのを待っているタクシーの中から、わたしは、ホームの風景をながめていた。わたしは、自分一人が年を経て、32年前の風景をながめている奇妙な錯覚に襲われた。思いが切実にならない違和感は、真夏の外気から隔絶されたタクシーの冷房のせいだろうか。[それとも、]わたしの/中でも/8月9日

は／遠い／昔に／なってしまった／せいだろうか。

“友よ” 林 京子

共通語の基盤は、首都である東京の言葉です。[ただし、] 東京の／言葉が、／そのまま／全部が／共通語として、／全国に／通用するとは／限りません。共通語は、それを全国的に通用するように多少修正したものとされています。現在は、テレビの普及、交通の発達、移住などにより、全国どこにでも共通語が浸透し、方言が消えつつあるようです。ひと昔前は、方言に劣等感をもつこともありましたが、今はそんなことも少なくなり、かえって、郷土の文化財として大切にされる風潮さえあります。[ただ、] それが／消滅しそうだから／保護するとか、／珍しいから／注目するとかいう、／消極的な／理由だけからだとする、／方言が／正当に／評価されていることには／なりません。

“方言と共通語” 加藤正信

道徳や宗教はもっぱら人間の内に働きかける。[したがって (1)、] その働きの／結果が／外部的に／実現されるかどうかということは、／宗教や／道徳の／本質上／決定的な／重要性は持たない。 [ところが、] 政治の／働きかけは、／必ず／現実／対象となった／人間が／政治主体の／目的通りに／動くということが／生命である。 [たとえば、] 共産主義の／プロパガンダにとっては、／多くの／人が／内心に／共産主義を／真理だと／思うようになったというだけでは／何にもならぬ。 それらの人が自分の陣営に現実に関心してきてはじめてそのプロパガンダは政治的に成功したといえるのである。

“人間と政治” 丸山真男

“あの男に限ってそんなはずはない。” “あの男のことだから、なにか深い事情があるのだろう。” と言って、いつの場合でも味方に立ってくれるのが古い友人というものである。[しかし (1)、] そういう／ありがたい／友人を／持つためには、／こちら／相手に／対して／真心を／尽くさなければならぬ。 [したがって (2)、] 古い、／いい／友人を／多く／持っている／人は、／その人自身も／また／信頼しうる／友人であるということができよう。 [ところで、] 世間には、／古い／友人を／いつまでも／大切にしている／人と、／絶えず／新しい／友人を／求めて、／交友関係が／しじゅう／変わっている／人とがある。 そして、一般に前者の方が信用され、後者の人間は軽薄であるように考えられている。[しかし (2)、] 絶えず／新しい／友人を／作ってゆく／人が／常に／軽薄であると

は、／簡単に／言うことができない。

“人とつき合う方法” 河盛好藏

映像コミュニケーションがいちじるしく増えた今日、映像との対比で言語の特質を論ずる意見がある。ごく単純化していうと、映像コミュニケーションは具体的であるのに対し、言語コミュニケーションは抽象性が高い。また、言語は論弁的シンボルであるのに対して、映像は現示的シンボルである。[そして (1)、] 両者を／比較すると、／言語の方が／本来／合理性を／そなえている。 なぜならば、映像には幾つかの要素が含まれるが、その要素は言語のように独立して意味を持つものではない。[つまり、] 映像は／語いを／持っていない。 結局は、そのもの自体として直感的に理解されるほかはないのである。[いっぽう、] 言語は／論理的に／理解することができる。

“活字媒体の今日的な意義” 岡部慶三

四方が陸続きで、たえず異民族と接する国々では、意志や感情が相手の国に誤解されたばかりに、紛争が起こることだってじゅうぶん考えられる。ところが、日本は島国で、古来、特定の国をのぞいては、異民族との交流が行われなかった。[だから、] 意志や／感情を、／身振り・表情を／まじえて、／異民族に／はっきり／伝達するための／苦労が／なく、／それらの／発達が／みられなかった。 [さらに、] わが国は／山が／多く、／川が／いりくんでいて、／交通の／発達しない／時代では、／人々は、／互いに／孤立した／狭い／土地に／集まって／生活していた。 したがって、他の地域の人とはほとんど交渉がなく、毎日の、近隣の人との生活は、ごくおおまかな言い方で、意志が通じ合っていた。この風土性が、日本のコミュニケーションの健全な発達をはばんできたことは否定できない。“話さなくてもわかり合える” というコミュニケーションのしかたは限られた交友関係しかなりたせていない。[また、] 自分の／意志や／感情を、／はっきり／相手に／伝えることの／まずさは、／日常の／会話の／貧しさや、／沈黙の／会議、／あるいは、／感情に／はしりがちな／会議などを／生んでいる。 外国人の身振りや表情を、きざざばくまねるのがよいとは思わない。[しかし (3)、] 自分の／意志や／感情を、／その人なりの、／場にあった／自然さで、／相手に／的確に／伝え合えるように／したいものである。 [そして (2)、] そのための／訓練こそが、／現代社会を／生きる／わたしたちの、／大きな／課題であると／思うのである。

“風神帖” 亀井勝一郎